

北海道測量技術講演会

「私たちの身のまわりの環境地図作品展」を通じた地図で『伝える』取組

氷見山幸夫

北海道教育大学名誉教授

「私たちの身のまわりの環境地図作品展」は、1991年8月に旭川市で開催された「環境変化と地理情報システム国際会議」(INSEG'91)の付帯事業の一つとして始められた、我が国唯一の児童生徒のための国際的な地図作品展です。この地図展の基本理念は、子供たちが自ら身のまわりの環境を観察し、その結果や考えたこと、感じたことなどを記録し、それらを地図作品に表現し、成果を発信することです。この地図作品展の学習効果は大きくかつ多様ですが、ここではそれを通じた地図で『伝える』取組を中心にお話しさせていただきます。

地図は地表の情報を収集し、記録し、整理し、分析し、表現し、そして伝えるための手段として、大変有用です。しかし日本の地図教育は、伝統的に地形図などのいわゆる官製地図の読み取りを重視しており、地図がもつ多様な用途や役割に広くこたえるものでは必ずしもありませんでした。一方で環境地図作りを取組む子供たちは、無意識のうちに情報の収集に始まる上記の一連のプロセスのすべてを苦勞しながら実際に体験し、地図に対する理解を深めています。さらに言えば、地域的・空間的・環境的・総合的なものの見方考え方を含む科学力全般の能力を高めています。

しかし優れた地図文化を社会に定着させるには、地図の作り手だけでなく、読み手の読む力も高める必要があります。幸い環境地図展にこれまでに出品された沢山の素晴らしい環境地図作品は、そのための多くの視点や材料、ヒントなどを私たちに提供してくれます。例えば1990年代にマセドニアから寄せられた公園の地図は、国が疲弊していた時代に公園の遊具の多くが壊れたりいたんだりしていたことを痛烈に訴えていました。また旭川の「フラワーロード」の地図は、自宅の近くの歩道に作られた美しい帯状の花壇への思いを町内、学区、北海道、全国へと、グローバルな思いにつないでいました。

勿論地図の良さにもいろいろあります。着想がユニークなもの、美しさに拘ったもの、研究心が光るもの、地図表現が素晴らしいもの、伝えるための工夫をこらしたもの、訴える力が溢れているもの、などなど。高学年の地図作品では、「どこに何々がある」という視点から一歩進めて「どういう(条件の)ところに何々がある」という視点からも地図の内容を吟味し、地図を作る側と読む側にとっての『伝える』取組の課題を考えたいと思います。限られた時間ですが、できるだけ多くの素晴らしい作品を皆さんと一緒に堪能し、学んでいきたいと思ひます。